

竹下 輝和

——その1、子ども部屋のプライバシー化現象についての
住文化論的考察——

目次

1. はじめに
2. 子ども部屋の空間概念とプライバシーイズム化現象
3. 中間的行為とプライバシーイズム化現象の顕示度合
 - 3-1 中間的行為の設定
 - 3-2 成長過程と子ども部屋への行為の持ち込み率
 - 3-3 プライバシーイズム化現象の顕示度合
4. 子ども部屋での〈過ごし方〉とプライバシーイズム化現象の実証
5. プライバシーイズム化現象の形成起因
 - 5-1 フィジカル的な起因
 - 5-2 ノンフィジカル的な起因
 - 5-2-1 〈与え方〉
 - 5-2-2 〈過ごさせ方〉
6. プライバシーイズム化現象の内在化と家族コミュニケーションへの影響
7. おわりに

1. はじめに

近代社会になって住居内に個室が成立した。今や、個室なしの住生活は考えることができない。個室は私室の一つの存在形態であるが、その使い方を誤ると家族のコミュニティに大きな影響を及ぼすことになる。というのは、個室はそれを利用する主体の意志によって様々な行為を持ち込むことができることから、仮に個室の方に住生活のウェイトが置かれるようになると家族成員間のコミュニケーションが著しく阻害されるからである。わが国では、こうした傾向が、とりわけ子ども部屋に顕著であり、子どもが子ども部屋に閉じ籠もるという現象が度々指摘されている。^(註1)

ところで、数年前よりこうした閉じ籠もり現象がマスコミから、いわゆる、「子ども部屋問題」としてセンセーショナルに取り上げられたが、これは、一部の特異な、病理的な現象ではなく、わが国ではごく一般的にみられる現象と考えられる。筆者らは、こうした現象を、「プライバシー化現象」、すなわち、「本来、プライバシー化する必要のない住生活行為が過度に個室へ持ち込ま

れた現象」として捉えるべきこと、さらにこの現象は、「住居内の公的空間と私的空間とを意識的に使い分ける行動様式」が未成立であることに要因していること、従って、プライバシー化現象は、個室成立以後の住生活様式における基本的矛盾を内在したもので、この解決にあたっては、単なるフィジカル的な対応策でなく、住み手の行動様式と規範を意識的に変革していく住文化論的視点が不可欠であると考えている。

本研究は、以上のような問題意識から、①プライバシー化現象を実際の子ども部屋での〈過ごし方〉から実証し、②その形成起因を子ども部屋の〈与え方〉、〈過ごしさせ方〉から考察するものである。

調査概要

①全国を対象にした、子ども部屋に関する総合的なアンケート調査。

調査協力を全国親子・子ども劇場に依頼した。配布数8,000票、回収数3,225票、分析有効票2,525票。調査期間昭和59年2月～9月。

②欧米系外国人を対象にした、子ども部屋に関するアンケート調査。

調査協力を日本へ留学中の大学生に大学機関を通じて依頼した。配布数700票、有効回収数267票。調査期間昭和61年9月。

③個別の詳細ヒアリング調査。

調査協力を北九州こども劇場の会員に依頼した。調査件数20件。調査期間昭和61年9月～10月

2. 子ども部屋の空間概念とプライバシー化現象

筆者は以前に以下のような空間概念の定義を試みたことがある。^{註2)} すなわち、空間概念は空間に要求されるところの機能構成によって第一義的に規定される。機能の構成は、機能が主に何によって規定されるかによって主体系と行為系に分かれる。主体系とは空間を利用する主体を限定して機能の構成を行う場合であり、行為系とは利用主体よりは、むしろ行為の方を限定する場合である。この行為系は行為の限定の仕方によって特定行為系と、多様な行為を総括的に対象とする総括行為系に分けられる。つまり、主体系は学級教室等が

該当し、特定行為系では、例えば食べる、寝る等の、いわゆる、食堂や寝室、総括行為系では居間等の多様な行為が営まれる空間が該当する。

さて、以上の概念定義に従うと、子ども部屋はいかに想定されようか。わが国では「子ども部屋」なる呼称が一般的であるが、「子ども部屋」なる呼称からは主体系が想定される。事実、わが国では子ども部屋は子どもの寝室としての機能のほかに、勉強行為しかり、遊び行為しかり、楽しみ行為しかり、様々な行為が空間を利用する主体を限定して営まれており、その実態からは主体系の空間概念が当てはめられる。ところが、欧米では子ども部屋の意味するところは子ども寝室であって、寝るためのベッドが置かれている部屋、すなわち、空間概念的には特定行為系であり、わが国の主体系の子ども部屋とはきわめて対比的な空間として機能している。⁸³⁾

一方、子どもは成長し発達することから、当然のこととして自我の成立に応じて個室での生活が多くなるが、わが国の現状では比較的早い段階から子ども部屋へ諸行為の持ち込みが行われ、住居内の生活の中心が子ども部屋に形成されている事実がある。この事実こそが本研究で指摘しているプライバシー化現象にはかならない。

3. 中間的行為とプライバシー化現象の顕示度合

子ども自身が自分の部屋で様々な行為を展開するには、何らかの行動価が存在することも事実である。この行動価とは、「モノ」の小型化とそのポータブル化が著しく進んだことによって住居内の生活行為が多様化し、公的とも私的とも明瞭に区分できない、いわゆる、中間的行為が増加し、これらの行為の営みの場所が自己集中的で非透視型の個室空間に求められている行為の諸形態のことである。わが国の場合、先に述べたように近代住居の成立過程において公的な空間と私的な空間の分離に対応してそれらを使い分けるような行動様式が成立していないために、様々な中間的行為が個室へ持ち込まれており、個室時代を迎えてその矛盾が子ども部屋にプライバシー化現象として顕在化されたものであると考えられる。

3-1 中間的行為の設定

住居内で展開される住生活行為をできる限り拾い出すと22の行為種に整理される。これらの行為は住居内のいずれかの空間で営まれるが、子どもの営み方は流動的であることから、行為が営まれる場所の限定化には難しい問題がある。しかしながら、流動的であるとはいえ、大まかに行為の性格に対応した場所の定着性

は存在することから、設定した諸行為の展開される場所が、主として子ども部屋であるのか、あるいは子ども部屋以外の部屋であるのかという行為の展開の大まかな場所性に注目して子ども部屋への行為の持ち込みを把握することができる。

次に、これをもとにして子ども部屋へ持ち込まれている行為種の関連性から、それぞれの行為がどのような性格を持っているか、その性格特性を示す類型化を試みる。分析は子どもの成長過程を考慮して、9歳から15歳まで1年ごとの年齢集団を設定し、〈クラスター分析／Rモード／MAX〉⁸⁴⁾を適用した。(図-1)

これによると、どの年齢集団も大きく4つのクラスターに分かれるが、それぞれのクラスターに属する行為種は年齢集団によって多少の差異が生じる。これを総合的に判断するためにクラスターごとの総計値で行為を類型すると、Aクラスターに属するのは「睡眠」、「着替え」といった行為で概ね私的な行為が該当する。これと対比的なのはDクラスターで、これに属するのは「食事」、「テレビ」、「会話」といった概ね公的な行為が該当する。このように現状の子ども部屋へ持ち込まれている行為種の関連性において、私的及び公的な性格が明瞭な行為種はクラスター分類の分離も明確になっているが、ここで問題なのは、A、Dクラスターのほぼ中間的な位置にあるB、Cクラスターに属する多種多様な行為種である。これらの典型的な行為としてBクラスターには、「勉強」、「物書き」、「読書」等、また、Cクラスターには、「軽い運動」、「ゲーム遊び」等が属するが、その他の行為は、B、Cクラスターの両方にまたがるもの(「ぼんやりする」、「歌う」、「楽器を弾く」等)や、AクラスターあるいはDクラスターにまで広がるもの(「音楽を聞く」、「趣味」、「一人遊び」、「ごろ寝」等)がみられ、総じてその展開される場所が限定されにくく、行為を営む主体の行動様式によって子ども部屋あるいはそれ以外の部屋が選択されている行為種と考えられる。このB、Cクラスターに属する行為種が、本研究で指摘している中間的行為と考えられる。(表-1)

3-2 成長過程と子ども部屋への行為の持ち込み率

次に、それぞれの行為がどの程度子ども部屋へ持ち込まれているか、その比率を年齢ごとに図示してみると、まずAクラスターの「睡眠」は9歳では60%で、15歳では90%の子どもが自室で睡眠をとっている。反面、「上着の着替え」、「下着の着替え」は持ち込み率が相対的に低く、中学生の段階でも6割程度となっている。また、Dクラスターの「食事」、「テレビ」、「会話」は年齢の増加に対してほとんど増加せず、「おやつ」が中学生の高学年でやや増加する程度である。「勉強」「音

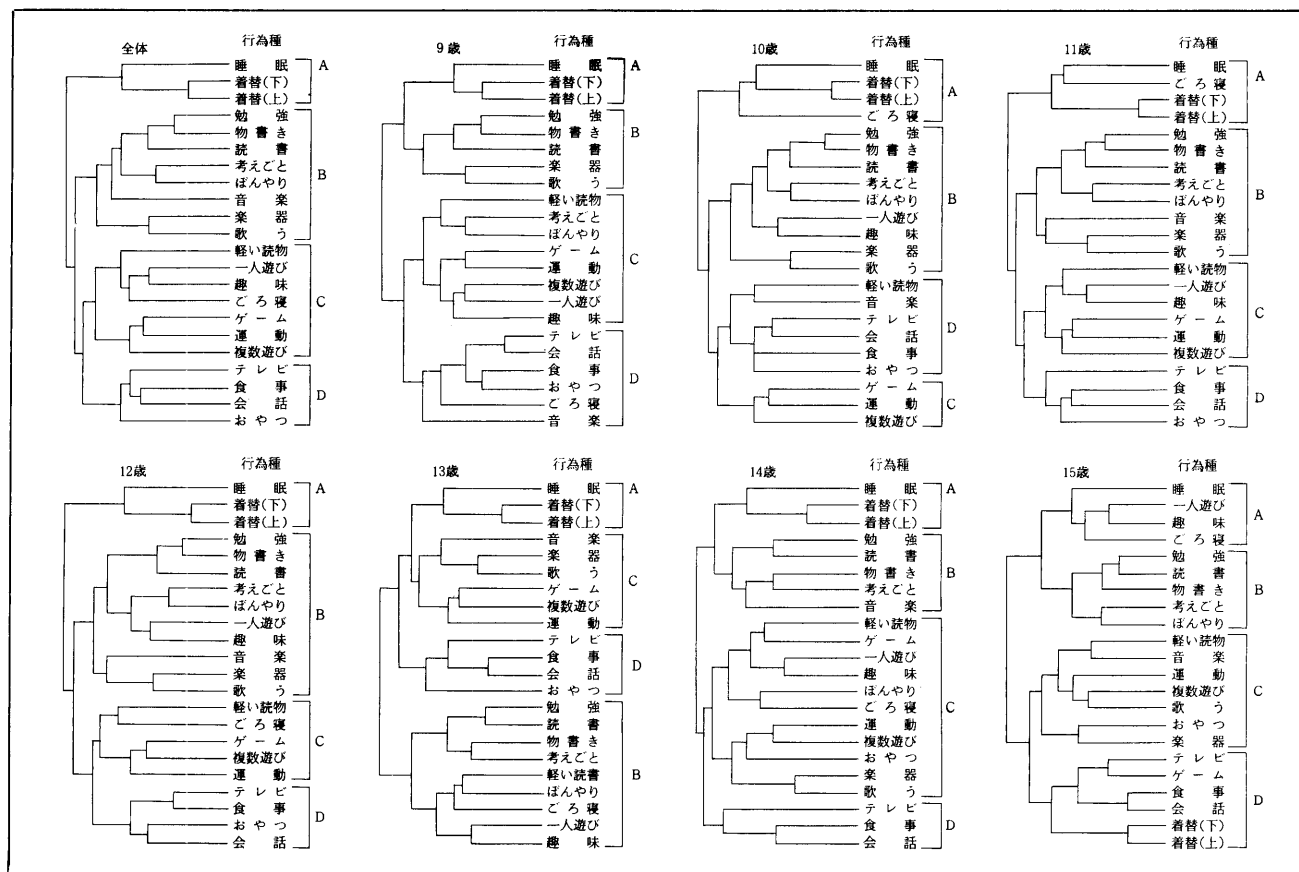


図-1 年齢別行為類型樹状図

表-1 年齢別行為類型表

		行為種	年齢別クラス				行為類型 記号化表	行為類型	
			A	B	C	D			
全 体 ク ラ ス タ	A	スイミン	7				-A	プライベート 行為	
		キガエシ キガエウ	6 6			1 1	-Ad		
	B	ベンキョ		7				B	中間的 行為
		モノカキ		7					
		ドクショ		7					
		カンガエ		6	1				
		ボンヤリ		5	2			-Bc	
		ガツキ		4	3			-B'c	
		ウタウ		4	3			-Bcd	
		オンガク		3	2	2			
	C	アンビO	1	3	3			Cad	パブリック 行為
		シュミ	1	3	3				
		ヨミモノ		1	5	1		-Cbd	
		ゴロネ	3	1	2	1		-Cabd	
D	アンビS			6	1		-Cd		
	ウンドウ			7			C		
	ゲーム			7					
	オヤツ			2	5		-Dc		
E	D	カイワ			7		D		
		テレビ			7				
		ショクジ			7				

行為記号化対応表

① 睡眠	スイミン
② 着換え(下着)	キガエシ
③ 着換え(上着), 身だしなみ	キガエウ
④ 勉強	ベンキョ
⑤ 物書き(日記, 手紙等)	モノカキ
⑥ 読書(文芸, 歴史, 科学等)	ドクショ
⑦ 考えごとをする	カンガエ
⑧ ぼんやりする	ボンヤリ
⑨ 楽器を弾く	ガッキ
⑩ 歌う	ウタウ
⑪ 音楽を聞く	オンガク
⑫ ひとりで遊ぶ(玩具等で)	アンビO
⑬ 絵や漫画, 手芸, プラモデル等の趣味	シュミ
⑭ 軽い読物をする(新聞, 雑誌, 漫画等)	ヨミモノ
⑮ ごろ寝, 昼寝	ゴロネ
⑯ 兄弟姉妹や友人と遊ぶ	アンビS
⑰ 軽い運動をする	ウンドウ
⑱ 将棋, トランプ等のゲームをする	ゲーム
⑲ 夜食やおやつを食べる	オヤツ
⑳ 家族と話す	カイワ
㉑ テレビを見る	テレビ
㉒ 食事	ショクジ

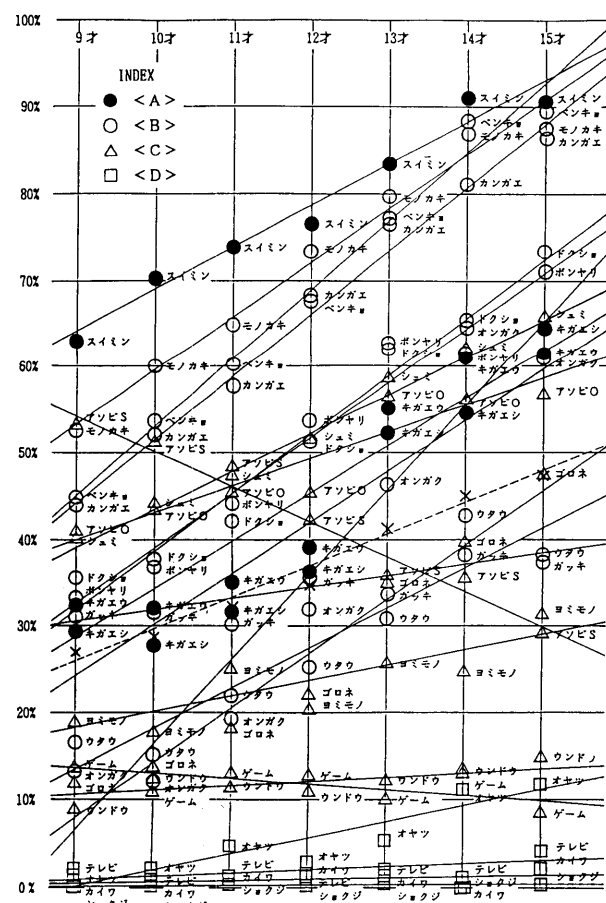


図-2 子ども部屋への行為持ち込み度(年齢別)

楽を聞く」といった行為は、年齢の増加に対して相対的に持ち込み率の急激な上昇が観察される。同じように持ち込み率の上昇が強いのは、Bクラスターの静的な環境を要求する行為（「物書き」、「考えごと」、「読書」等）や、逆に音を伴うことから他の家族成員の行為との矛盾の回避が要求される行為（「楽器を弾く」、「歌う」等）である。そして、さらにCクラスターに属する行為（「一人遊び」、「趣味」等）も子ども部屋への持ち込みが年齢の増加とともに高くなっている。（図－2）

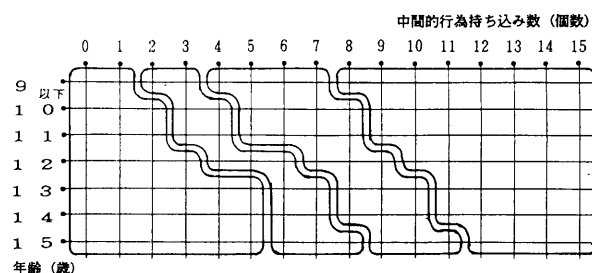
3-3 プライベティズム化現象の顕示度合

プライバシー化現象は多なかれ少なかれ、わが国では一般的にみられる現象であるが、その現象の顕示度合は子どもの人格や成長の在り方、あるいは、子ども部屋の条件及び実際の住まい方によって当然異なる。そこで、以下の分析にあたっては、プライバシー化現象の顕示度合に注目して分析対象集団を区分し、それらを相互に比較することによって実証する方法を採用した。プライバシー化現象の顕示度合は、先に分析した中間的行為がどの程度子ども部屋へ持ち込まれているか、その行為種の量によって判定した。ところで、子どもの成長とともに持ち込みが変化することから、この量は9～12歳でF分布、13～15歳で正規分布に近い形をとる。そこで、各年齢段階ごとに中間的行為の持ち込み量の分布形態において区分した分析対象集団の構成比が等しくなるように操作的に全体を4分割した。ここで区分設定したプライバシー化現象の顕示度合を示す集団は、中間的行為の持ち込み量が最も少ない集団＝P1とし、順にP2、P3、最も持ち込み量の多い集団＝P4とした。（図－3）（表－2）

4. 子ども部屋での〈過ごし方〉とプライバシー化現象の実証

実際の子ども部屋での〈過ごし方〉をまずアンケート調査から分析する。分析は、子ども部屋への行為種の持ち込み率と家具及び備品の持ち込み率をもとに行う。

第1に特徴的なことは、小学生、中学生のいずれにおいても家具及び備品、即ち、「モノ」の持ち込み率はP1～P4のいずれの集団でも差異があまりみられないのに対して、行為種の持ち込み率にはきわめて大きな差異がみられることである。このことは、本研究で指摘しているプライバシー化現象が単に「モノ」の持ち込み率によって規定されるといった単純な問題ではなく、実際の住まい方における行動様式との関連で捉えられるべきことを意味している。（図－4）（図



図－3 顕示度合別集団設定モデル図

表－2 分析対象集団設定概要

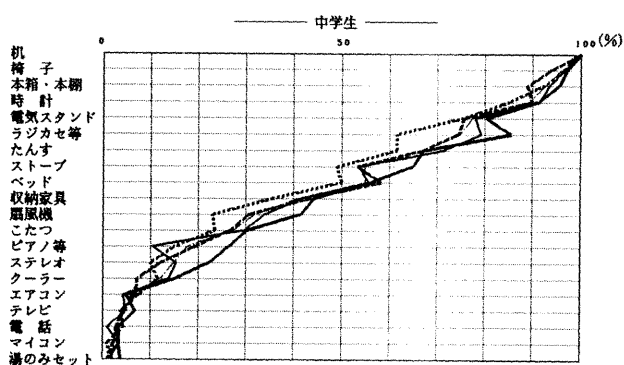
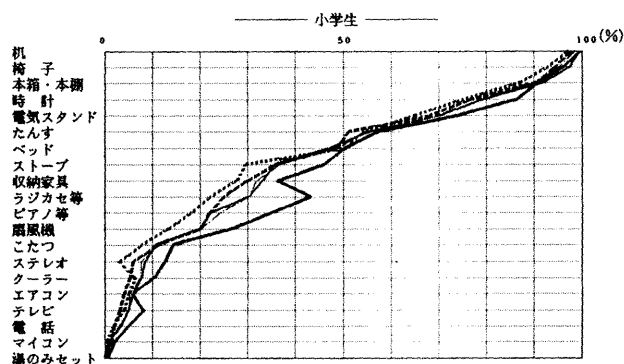
記号	ケース数	年齢別 ケース数（歳）							
		9	10	11	12	13	14	15	
P1	629 (24.9)	36 (22.4)	151 (26.1)	120 (21.3)	114 (24.2)	108 (31.5)	65 (25.1)	35 (23.6)	
P2	605 (24.0)	32 (19.9)	130 (22.5)	118 (20.9)	145 (30.7)	81 (23.6)	57 (22.0)	42 (28.4)	
P3	674 (26.7)	52 (32.3)	172 (29.8)	175 (31.0)	92 (19.5)	78 (22.7)	62 (23.9)	43 (29.1)	
P4	617 (24.4)	41 (25.4)	125 (21.6)	151 (26.8)	121 (25.6)	76 (22.2)	75 (29.0)	28 (18.9)	
合計	2525 (100.0)	161 (100.0)	578 (100.0)	564 (100.0)	472 (100.0)	343 (100.0)	259 (100.0)	148 (100.0)	

上段：ケース数
下段：構成比（％）

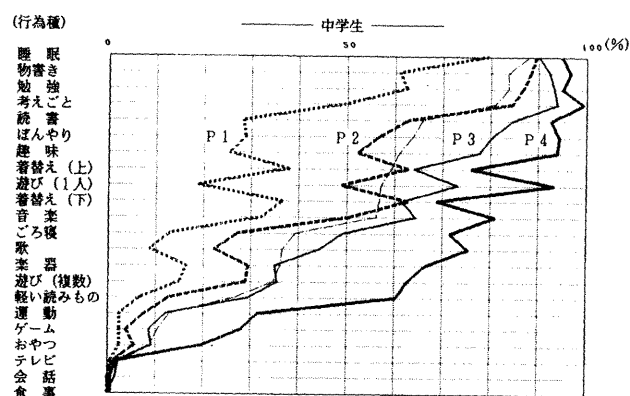
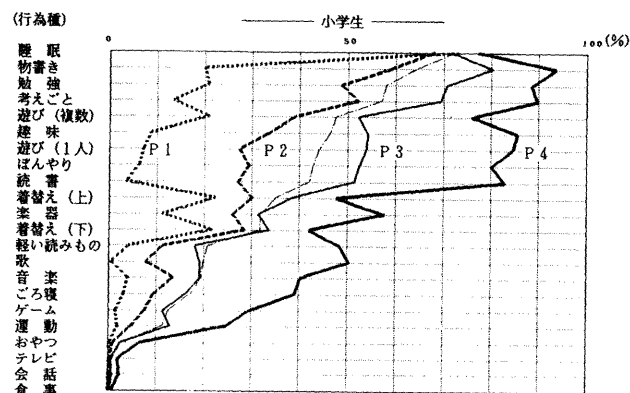
－5）

小学生のP1集団は、「睡眠」を除けば、いずれの行為も子ども部屋への持ち込み率が10～20％であるのに対して、P4集団は、Dクラスターに属する「食事」、「テレビ」、「会話」といった行為を除いて、いずれの行為も持ち込み率が高い。先に述べたBクラスターに属する中間的行為、例えば、「勉強」、「物書き」等は、いずれも80～90％のきわめて高い持ち込み率を示し、さらに、これらに引きずられて「音楽を聞く」、「歌う」といったCクラスターに属する遊び行為やレクリエーション行為の持ち込み率も30～50％と高くなっており、P1集団とはきわめて対比的な傾向を示す。P2～P3集団は、これらのほぼ中間的な位置にある集団であるが、顕示度合の高い集団になるにつれて、「勉強」、「物書き」といった少しでも静的な環境が要求される行為において、子ども部屋への持ち込み率が相対的に高くなっており、P3集団で持ち込み率が全体の平均を上回っている。

以上の傾向は、中学生になるとさらに一段と進み、P2集団で中間的行為の持ち込み率が全体の平均に近くなり、P4集団では、B、Cクラスターの中間的行為に属する2/3の行為種で持ち込み率が70％以上と、大部分の行為種が子ども部屋で営まれるようになっていく。またさらに、P4集団の一部には、「おやつ」、「テレビ」といったDクラスターに属する公的な行為までが子ども部屋へ持ち込まれているものがみられる。（図－



図一4 「モノ」の持ち込み度



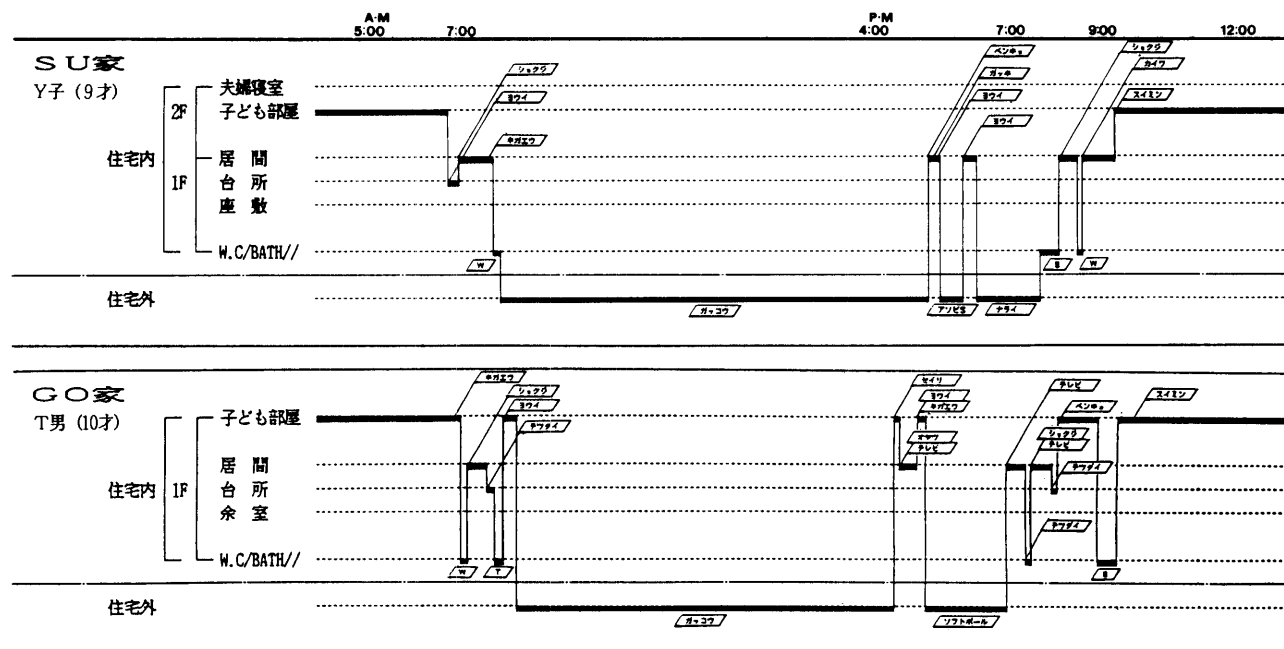
図一5 行為種の持ち込み度

5)

このようなプライバシー化現象の度合を顯示する集団として設定したP1～P4 集団は、子ども部屋での実際の〈過ごし方〉において質的な差異があることを示しており、子ども部屋の空間概念がP1 集団では特定行為系で機能しているのに対して、他のいずれの集団も主体系で機能していることを窺わせる。特に、P4 集団の〈過ごし方〉は、まさにマスコミで指摘された「子ども部屋閉じ籠もりっ子」そのものの行動様式であり、一種の病理的な現象として注意が必要な集団と考えられる。

第2に特徴的なことは、子ども部屋の性格であるが、「睡眠」や「上着の着替え」の持ち込み率の低さが示すように、私的空間としての性格が曖昧になっていることである。具体的には、「睡眠」の持ち込み率が小学生のいずれの集団も約60~70%、中学生のP1集団は80%と、就寝行為が行われない子ども部屋が存在しているという事実や、「上着の着替え」がいずれの集団においても持ち込み率が30~35%と非常に低いという事実、さらに、P3~P4集団において、「勉強」、「物書き」等の持ち込み率が逆転して「睡眠」よりも高くなっている事実からも私的空間としての性格の曖昧さを知ることができる。

次に、P1 集団、P4 集団にそれぞれ該当する子どもの居住実態を詳細住まい方調査の典型事例より分析する。SU 家（5 人家族）の長女 Y 子（9 歳）は、5 歳の時に共用室を与えられて P1 集団に属している。彼女の場合、居間での食事や親との会話等公的な行為はもちろんのこと、ピアノの練習等趣味的行為を始めとして、さらに勉強行為も行っているために、居間での滞留時間がきわめて長い。調査日の一日断面の帰宅時から就寝時前までの在宅時間量155分（外遊び30分と、ピアノの塾の時間量70分を除く）のうち、居間にいる時間がほとんどで約110分の滞留時間量となっており、子ども部屋の方は就寝を除けば帰宅後の着替えと荷物置きぐらいにしか利用されていない居住実態であった。一方、GO 家（4 人家族）の長男 T 男（10 歳）は、7 歳の時に共用室を与えられて P4 集団に属している。彼の場合、在宅時間量190分のうち、テレビ、食事、おやつ等の公的な行為だけが居間で行われるだけで、居間での滞留時間量が約90分程度と少なく、従って、様々な行為が子ども部屋の方へ持ち込まれており、滞留時間量が約60分程度と大変長くなっていた。以上のごとく、プライバシー化現象の顕示度合が異なる集団の居住実態には質的な差異があることが理解される。（図－6）



図ー6 1日の生活行為の展開（詳細住まい方調査）

5. プライベティズム化現象の形成起因

5-1 フィジカル的な起因

子ども部屋の空間形態は大きく個室と共用室に分かれるが、アンケート調査の結果からは、全体で小学生では個室32.4%、共用室67.6%、中学生ではそれぞれ61.5%、38.5%となっており、子どもの成長とともに個室の比重が高くなっている。続いて、子ども部屋の空間形態とプライバシー化現象顕示集団との関連をみていくと、小学校ではP1集団の31.8%が個室であり、P4集団もほとんど変化はなく34.7%が個室となっている。中学生では、P1集団が53.4%、P4集団が64.8%とプライバシー化現象の顕示度合の高い集団で個室が多くなっているものの、あまり顕著な差はみられない。

ところで、子ども部屋の共用室は、兄弟姉妹が利用主体となっている部屋で、利用主体が複数であることから個室とは異なるものの、利用主体の人間関係によって同質的な利用主体となるために、その性格は個室に近くなり空間概念的にも主体系として機能しているものと考えられる。

以上のように、プライバシー化現象と子ども部屋の空間形態には直接的な関連性はあまり強くなく、プライバシー化現象が単なるフィジカル的な起因で規定されているものではないことを意味している。

但し、住居水準とプライバシー化現象との関

係をみると、家族人数の方が居住室数より多い住居水準の低い世帯で、小学生、中学生ともにP4集団がそれぞれ22.1%、23.8%とP1集団を上回っていることは注目される。

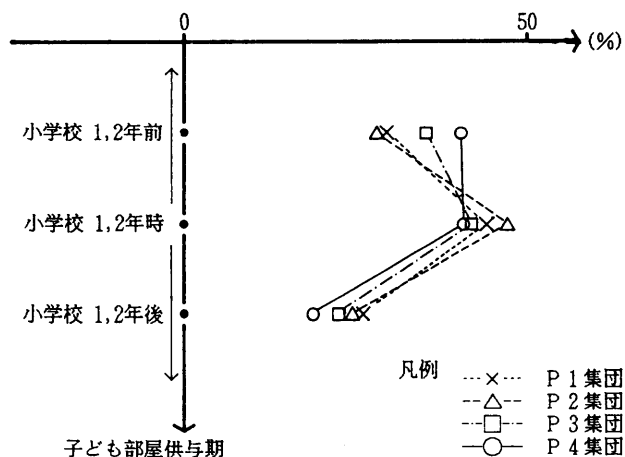
5-2 ノンフィジカル的な起因

5-2-1 〈与え方〉

子ども部屋の与え方の違いがプライバシー化現象といかに関係しているかを分析する。

まず、子ども部屋が与えられた時期についてみると、共用室は概ね小学校の1、2年生までに与えられ、個室の方は供与形態によって異なるが、当初から個室であるものは小学校の1、2年生までに、当初共用室であったものが後に個室を与えられたものは小学生の高学年から中学生にかけて与えられている。そこで、個室、共用室を問わずいずれかの部屋が与えられた時期とプライバシー化現象の顕示集団との関係をみると、小学校1、2年生時より前に与えられたもので、P4集団の比率がやや高くなる傾向がみられ、子ども部屋が与えられた時期の早遅とプライバシー化現象には若干の相関が確認される。（図ー7）

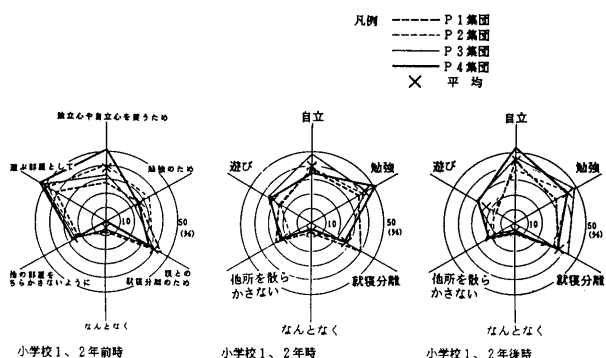
次に、子ども部屋が与えられた時期、即ち、ここでは親が子どもへ子ども部屋を与えた時期と認識している時期と、親あるいは兄弟姉妹との就寝分離の時期との関係を分析すると、きわめて特異な現象がみられる。つまり、親あるいは兄弟姉妹のいずれの就寝分離においても、その時期が子ども部屋が与えられた時期より



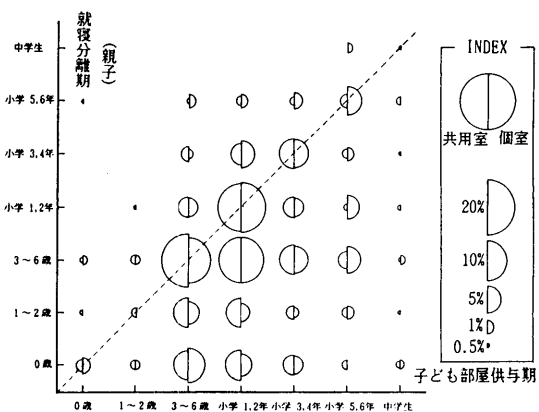
図一七 子ども部屋供与期

も早いものが非常に多いことである。(図-8, 9) このことは、将来子ども部屋として与えられる空間が住宅内に既にあり、実際にそこで就寝が行われておりながら、親の認識ではまだ子ども部屋を子どもへ与えていないという事実を示すものである。この事実は非常に注目される。というのは、子ども部屋が与えられた後の子ども部屋での〈過ごし方〉が、与えた親の目的と、それによって規定される親からの〈過ごし方〉によって大きく影響されることを意味するものであるからである。

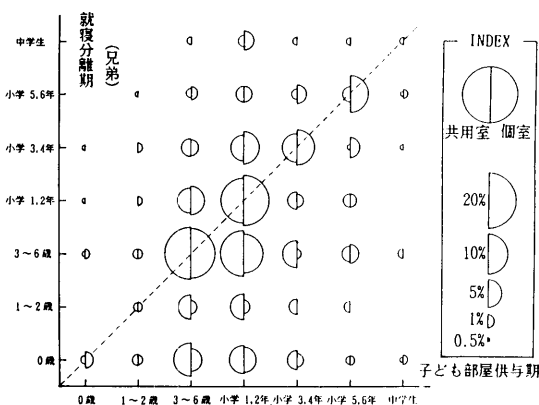
そこで次に、親の子ども部屋を与えた目的意識とプライバシー化現象との関連をみると、特徴的な点は、まず第1に、いずれのプライバシー化現象の顕示集団においても子ども部屋を与えた目的意識が部屋を与えた時期に強く規定されていることである。しかも、第2に、プライバシー化現象の顕示集団の違いによって目的意識が変化していることである。即ち、P1 集団では「遊びのため」や「就寝分離のため」が多いのに対して、P4 集団では「自立のため」か、あるいは「勉強のため」とするものが多いことである。(図-11)



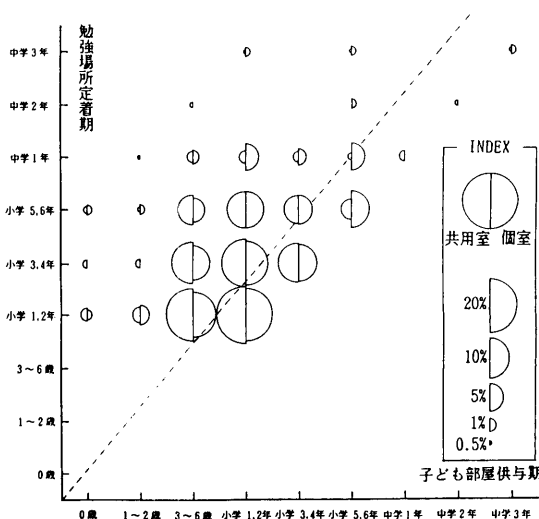
図一11 子ども部屋供与目的(親)一MA式



図一八 子ども部屋供与期と就寝分離(親子)期の関係



図一九 子ども部屋供与期と就寝分離(兄弟)期の関係



図一10 子ども部屋供与期と勉強場所定着期の関係

ところで、子どもが実際に子ども部屋で勉強をするようになった時期と子ども部屋が与えられた時期との関係をみてみると、一定の時期のズレを含めて非常にその相関が高いことが窺える。(図-10) このことは、先に分析した就寝分離の時期と子ども部屋が与えられた時期とに全く相関がなかった事実と対比すると、実際に子どもが子ども部屋で営む行為は、子ども部屋が

与えられた後に、親の供与の目的意識―「自立のため」、「勉強のため」等によってとられる行動の規制が大きく影響していることを示している。

5-2-2 〈過ごさせ方〉

子ども部屋を与えられた直後の子どもの主な行為―就寝、勉強、遊びについてその営まれる場所の変化をみると、プライバシー化現象の顕示度合の高い集団ほど、場所の変化が大きいことが分かる。特に、勉強については、P1 集団と P4 集団の差異が著しく、前者は子ども部屋を与えた直後の勉強行為の場所の変化があまりないのに対して後者は大きく変化している。(図-12)

しかしながら、こうした顕著な差異の一方で、親のとした態度、即ち、子ども部屋で行うことに行動の規

制をとったか否かについては、いずれの顕示集団においても差異がみられず、子ども部屋の使い方は子ども自身の自由に任せたとするものが大部分である。(図-13)

こうした事実、意識化せずにとった親の態度のいかんが子ども部屋での行為の定着に深く影響していることを示している。つまり、親が子ども部屋を与える以前から親自身に形成されていたイメージ、即ち、子ども部屋を与えた目的意識にあるように、自律した生活態度を身につけさせたい、あるいは静かな部屋で勉強に集中させたいとする子ども部屋の先見的な像があり、これによって無意識的に行われる〈過ごさせ方〉が原因となって子ども部屋を与えた直後の行為の定着化が行われるのではないかと考えられる。

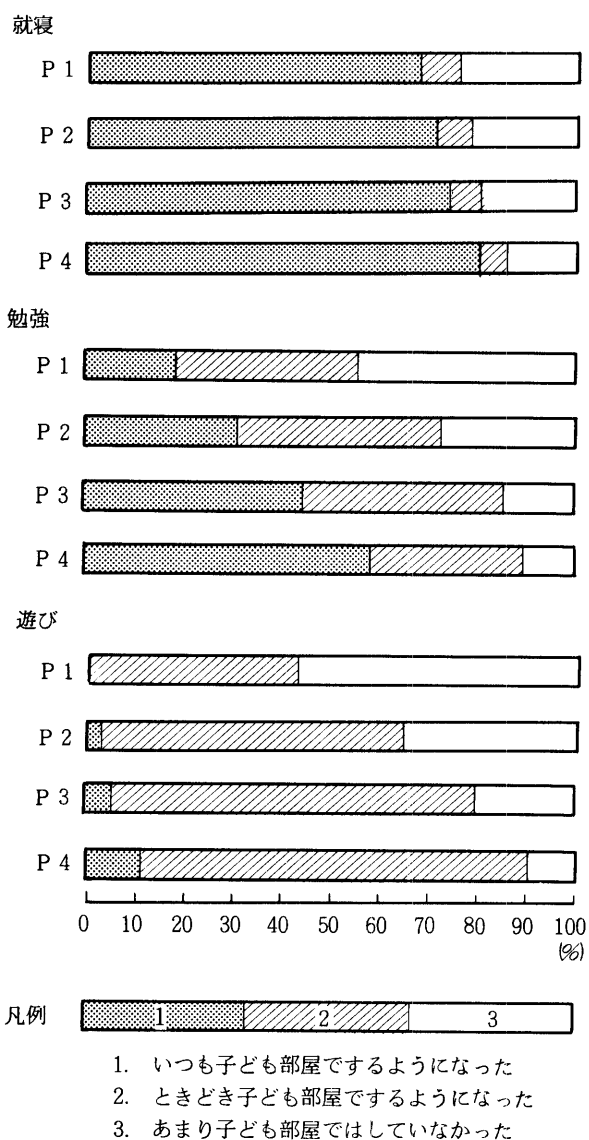


図-12 子ども部屋を与えた後の生活の場の変化

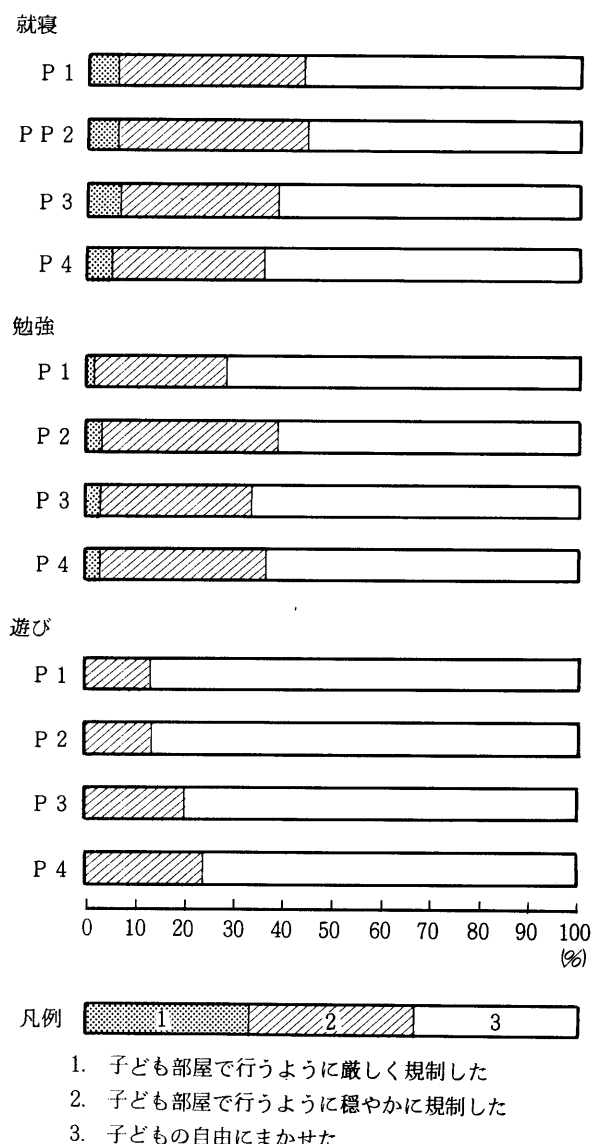


図-13 子どもの生活の場の選択に対する親の態度

6. プライベティズム化現象の内在化と家族コミュニティへの影響

プライベティズム化現象の形成には、子ども部屋が親によってどのように与えられたか、その〈与え方〉、さらに与えられた後に、親が子どもに対して子ども部屋でどのように過ごさせたのか、その〈過ごさせ方〉が大きく起因していることが理解された。

さらに、問題なのは一旦こうしてプライベティズム化現象の起因がつけられると、子ども自身の成長によってますますプライベティズム化現象が増長されることである。つまり、子ども部屋の与えられる時期が子どもの精神・心理的に自立・自律するかなり以前であり、その時点で「勉強」や「遊び」等を始めとして親からの行動の規制がとられることから、それ以後の子どもの成長過程においてこうした行動の規制が子ども自身に受容される結果、諸行為が子ども部屋にますます持ち込まれることになる。こうして子どもの成長とともに、主体系の空間概念を反映した行動様式がとられることになり、プライベティズム化現象が子ども自身の心理の中に内在化していくことになる。

このことを子ども自身の意識から分析する。まず、子ども部屋に対する子ども自身の帰属意識を、住居空間の中で「一番好きな場所」はどの空間であるかとの回答からみてみると、小学生、中学生のいずれにおいてもプライベティズム化現象の顕示度合の高い集団ほど「自分の部屋」の回答が多くなり、子ども部屋への帰属意識が強くなっていることを示している。特に、中学生ではこの傾向が顕著となり、P1 集団で「自分の部屋」が30.9%、「居間や茶の間」が63.4%であるのに対して、P4 集団ではそれぞれ65.5%、27.3%ときわめて対比的な傾向を示している。また、子ども部屋への親の出入りに対する意識を子どもの在室時、留守時の両者でみてみると、小学生の段階ではプライベティズム化現象の顕示度合に関係なくいずれも大部分が寛容的な許容があるのに対して、中学生になると、P4 集団で寛容的な許容が著しく減少する。このことは、プライベティズム化現象が内在化されることによって、子ども自身の中に子ども部屋像—子どもと子ども部屋を結びつける意識—が形成され、さらに、これが規範となって主体系の空間概念を反映した行動様式が定立されるものと考えられる。

以上のことから、プライベティズム化現象は子どもの成長とともに子ども自身に内在化されることによって、子ども自身の中に子ども部屋像—子どもと子ども部屋を結びつける意識—が形成され、さらに、これが規範となって主体系の空間概念を反映した行動様式が定立されるものと考えられる。

さて、こうしてプライベティズム化現象が増長されていくと、家族成員間のコミュニケーションへ影響が出てくる。子ども自身に対して質問した居間の滞留時間の量に関しては、「大変多い」との回答の比率が、P1 集団の小学生は62.0%、中学生は50.0%とあまり差がないが、P4 集団ではそれぞれ40.0%、11.8%と非常に大きな差がみられること。またさらに、親に対して質問した子どもとの会話の量に関しては、同じように小学生の段階では P1 集団と P4 集団との差がほとんどないのに対して、中学生では、「よく話す」とするものが P1 集団で36.5%、P4 集団で24.5%と減少しており、ここにもプライベティズム化現象が増長することによって家族のコミュニケーションに影響が与えられることが示されている。

7. おわりに

個室成立以後の住生活の問題を子ども部屋のプライベティズム化現象を通じて分析したが、次のような課題を残している。

① プライベティズム現象は、ひとつは、子ども自身の心理の中に内在化され、子ども自身によって諸生活行為が子ども部屋へ意識的・無意識的に持ち込まれていることによるものと、もうひとつは、公的な空間である居間や茶の間の空間の規模や構成の問題によって、こうした子どもの行為を受け止めることができずに排斥され、結果的に子ども部屋に持ち込まれていることによるものと大きく分けられる。現実的にはこの両者は、わが国においては相互不可分の問題であると考えられるが、後者の居間や茶の間の分析が不足していること。

② プライベティズム化現象は、本来住生活の詳細な実態との関係で分析が行われなければならないものと考えられる。この詳細な調査は、住生活が時間の流れでどのように展開されたのか、また、子どもの成長過程の全体を通じてどのような住まい方が展開されたのか、その履歴調査、あるいは、親と子の人間関係が行動様式にどのように反映しているか等、被調査対象者に対してかなりの負担を与えるために困難な調査となる。今回部分的な調査は行い得たが、その補充調査が必要であり、この分析が不足していること。

③ 公的な空間と私的な空間との使い分け行動様式が欧米系の生活様式においていかに確立されているかの分析が不足していること。

以上3点である。

謝 辞

本研究にあたり、全国調査では全国親子・子ども劇場会員及び事務局の皆様、福岡子どもの文化研究所及び子どもの生活と住宅を考える会の皆様の協力を得ました。また、留学生調査では日本留学中の欧米系外国人及び各大学の担当事務局の皆様の協力を得ました。さらに、個別の詳細住まい方調査では北九州子ども劇場会員の皆様の協力を得ました。記して深謝いたします。

〈注〉

- 1) 扇田 信：「住生活の研究」(『現代人の生活空間論・上』) S. 49 勁草書房
今 和次郎：「住居論」 S. 46 ドメス出版
宮脇 檀：「新3LDKの家族学」 S. 57 グロビュー社
宮脇 檀：「子ども部屋は不要？」(『グラフ NHK』) S. 58.5
住まい文化キャンペーン推進委員会：「住まい文化に関する基本調査(要約)」 S. 58.11
西山卯三：「すまいの思想」 S. 49 創元社
扇田 信：「住生活学」 S. 53 朝倉書店
沢田美智子：「子ども部屋のスピリット」(『マイホームプラン』) S. 58.5 「遅れるな！マイホーム必勝作戦」(『週刊宝石』) S. 58.19
栗田 仁：「もう一つの住まい学」 S. 56 時事新報社
渡辺武信：「すまいの思想」 S. 58 中公新書
吉田 豊：「子ども部屋くらしの舞台(6)」(季刊「まち&すまい」) S. 58 秋
桐島洋子：「わたしのアメリカ体験記」(『コスモス』) S. 58 春
外山知徳：「子ども部屋」(現代のエスプリ No. 210) S. 60. 1 至文堂
- 2) 竹下輝和「保育所児児部(3歳未満児)の平面用途構成に関する研究 第3報」日本建築学会論文報告集第314号
- 3) 欧米系留学生に対するヒアリング調査 (S. 61 年2月福岡市) による。
- 4) 三宅一郎・山本喜一郎：「SPSS 統計パッケージ I・II」東洋経済新報社

〈参考文献〉

- * 竹下輝和：「子ども部屋に関する住文化論的考察 その1～7 昭和59～61年度日本建築学会大会学術講演梗概集
- * 竹下輝和・益田信也：「『公私室型』をめぐる二、三の理論的諸問題について その1、その2」昭和61年度日本建築学会大会学術講演梗概集
- * 落合恵美子：「近代家族の誕生と終演」『現代思想』1985 vol.13 -6 青土社
- * 「家庭の友」 M. 36～M. 38 家庭の友社
- * 「婦人の友」 M. 44～S. 12 婦人の友社
- * 「主婦の友」 T. 6～S. 3 主婦の友社
- * 三橋四郎：「理想の家屋・中巻」 T. 2 大倉書店
- * 大沢三之助・近間佐吉：「模範日本住宅」 T. 8 鈴木書店
- * 西村伊作：「現代人の新住家」 T. 8 文化生活研究会
- * 小泉武夫・広田栄三：「住居を住みよくする法」 S. 5 二松堂
- * 山本拙郎：「和洋住宅設計設備の知識」 S. 6 実業之日本社
- * 萩原星文館：「図解和洋建築の住宅設備」 S. 9 時事新報家庭部編
- * 市浦 健：「住宅の平面計画」 S. 18 相模書房
- * 西山卯三：「これからのすまい」 S. 22 相模書房
- * 塘 一郎：「これからの住生活」 S. 27 彰国社
- * 池辺 陽：「すまい」 S. 29 岩波婦人叢書
- * 河合慎悟・小川武夫・津高正文：「家・親と子・社会」 S. 34 関書院
- * 扇田 信：「公私室型住宅の分析—私室部分について—」 S. 34 日本建築学会論文報告集 第63号
- * 扇田 信：「ホワイトカラー層の住要求(プライバシーについて)」 S. 36 日本建築学会論文報告集 第69号
- * 西山卯三：「住居論」 S. 43 勁草書房
- * 西山卯三：「住宅計画」 S. 43 勁草書房
- * 鈴木成文：「建築計画学6 集合住宅 住戸」 S. 46 丸善
- * 浜口ミホ：「建築学大系住居論」 S. 29 彰国社
- * 西山卯三：「日本のすまい I」 S. 50 勁草書房
- * 西山卯三：「日本のすまい II」 S. 51 勁草書房

- * 扇田 信：「住居観・住様式」(『住宅問題講座6 住宅計画』) S. 43 有斐閣
- * 有地 亨：「近代日本の家族観 明治編」 S. 52 弘文堂
- * 竹内芳太郎・下河辺千穂子：「農村住宅」(『住宅問題講座6 住宅計画』) S. 43 有斐閣
- * 大須賀常良：「住居学」 S. 41 彰国社
- * 小林 清：「住宅デザイン双書2 寝室・書斎・子供室」 S. 42 創元社
- * 「主婦の友 実用百科事典4 園芸・住宅」 S. 43 主婦の友社
- * 山本和郎：「子どもの成長と建築」(『建築のための心理学』) S. 44 彰国社
- * 松下清夫・藤井清一・武 保：「住居」 S. 41 家庭教育社
- * 野々村五四男：「住居学概説」 S. 41 理工図書
- * 相川三郎：「住居の計画 わかりやすい建築講座5」 S. 44 彰国社
- * 柴岡亥佐雄・千野 弘：「(建築学大系独立住宅)」 S. 45 彰国社
- * 塘 一郎：「これからの住生活」 S. 41 彰国社
- * 青木志郎：「これからのすまい」 S. 49 家の光協会
- * 高田秀三：「住いを考える」 S. 48 学芸出版社
- * 武藤重郎：「住居設計学」 S. 49 朝倉書店
- * 小野康子：「(資料 住居学)」 S. 50 建帛社
- * 扇田 信：「住生活の研究について」(『現代人の生活空間論・上』) S. 49 勁草書房
- * 今和次郎：「住居論」 S. 46 ドメス出版
- * 武田満す：「住居学」 S. 56 理工学社
- * 花岡利昌：「入門住居学」 S. 56 光生館
- * 小林秀彌・尾山孝一：「住居学概論」 S. 57 理工学社
- * 北村 君・近藤公夫・疋田洋子：「住居管理学」 S. 50 朝倉書店
- * 金子幸子・新福祐子：「住生活の研究」 S. 51 学芸図書
- * 清家 清：「知的住居学」 S. 54 センチュリープレス
- * 宮脇 檀：「新3LDKの家族学」 S. 57 グロビュー社
- * 宮脇 檀：「子ども部屋は不要？」(『グラフ NHK』) S. 58.5
- * 住まい文化キャンペーン推進委員会：「住まい文化に関する基本調査(要約)」 S. 58.11
- * 西山卯三：「すまいの思想」 S. 49 創元社
- * 扇田 信：「住生活学」 S. 53 朝倉書店
- * 山本厚生：「人間関係を閉ざす住宅事情」(『小さい仲間』) S. 57.2
- * 沢田美智子：「子ども部屋のスピリット」(『マイホームプラン』) S. 58.5
- * 平井 聖：「日本住宅の歴史」 S. 49 日本放送出版会
- * 平井 聖：「図説 日本住宅の歴史」 S. 55 学芸出版社
- * 「遅れるな！マイホーム必勝作戦」(『週刊宝石』) S. 58.8.19
- * 斎藤外二：「新しい住まい方」 S. 57 彰国社
- * 東 孝光：「寝室・子供室・老人室の増改築」(『マイホームプラン』) S. 58.8
- * 栗田 仁：「もう一つの住まい学」 S. 56 時事新報社
- * 渡辺武信：「すまい方の思想」 S. 58 中公新書
- * 吉田 豊：「子ども部屋 くらしの舞台(6)」(季刊「まち&すまい」) S. 58 秋
- * 桐島洋子：「私のアメリカ体験記から」(『コスモス』) S. 58 春

〈研究組織〉

- | | | |
|----|----------|-----------------|
| 主査 | 竹下輝和 | 九州大学助教授・工博 |
| 委員 | 益田信也 | 九州大学助手 |
| | 桑原俊隆 | 九州大学大学院生 |
| | 熊谷雅也 | 九州大学大学院生 |
| | 豊福エミリア信子 | 九州大学大学院生 |
| 協力 | 江上 徹 | 九州産業大学助教授 |
| | 七浦久子 | 筑紫女子短期大学講師(心理学) |
| | 藤沢加代 | 北九州子ども劇場 |
| | 山田満喜 | 福岡子ども劇場 |
| | 前田 隆 | 九州大学学生 |